

低年齢期の理性発達過程について

—— ヒト学習の成立基本要件 ——

松 野 憲 二

はじめに

自覚存在であるヒトの学習の実践的な成立過程要件について、これまで考察を重ねた。今回は、低年齢者の理性発達過程について論及する。その目的は、自覚体であるヒトの学習の基本契機である自覚動機が年齢にかかわらず成立する実践的よりどころを求めるところに在る。

こうした問題はこれまでも扱ってきたが、標題の意義に集約して改めて取り上げた。次の内容項目を設けた。(1)実在的で実践的な理性概念の意義 (2)自分感の成立 (3)自分感における超越的実在性 (4)低年齢期の理性活性化保障原理。素材を、川崎 洋撰『こどもの詩』などに求めた。論及の基調的姿勢は以下の三項目である。(a)学習の成立する過程を考究することは教育論の第一の契機である。(b)この契機が機能するためには教育の側が対象への期待価値実現主義心性から脱却しなければならない。(c)教育の実践性は学習者の生活実践的意義に在る。

基調的姿勢(a)について；学習が教育によって成立するのではなく、教育が学習によって成立するということに、学習・教育関係の実相が在る。学習は事実として、生命体の自己保障への経験獲得生活行為であり、理性を本質とするヒトはこの意義を自覚的に展開する。意義は個体の選好の対象になるものではなく、不可避・必然なものである。不可避・必然な学習意義が内面化されれば、意義は行為の内発な動機と成る。不可避・必然な学習の意義の拘束性を嫌って、例えば知的欲求自動の自己目的な学習の行為をヒト本来のものとするれば、自覚存在の主体性を失って個体は欲求自律の法則運動に従うことになり、種としての尊厳性を失う。幼児期を中心にした身辺行動自立などの問題も、基本においては自覚存在の学習の問題として捉える姿勢が求められる。特定能力や感性涵養のために行う胎教の意義を認めるならば、本質である理性涵養のために、自覚的学習の意義を了解した教育的関わりの姿勢の胎教が求められる。基調的姿勢(b)について；近代以降の学校体制の整備過程で、教育とは教育の側が自らの見識に基づいた理想・期待価値を対象に実現する行為、という教育心性が一般化した。近代以降一般化してきた教育心性は、生活自立のために不可避に個体の行うべき学習行為が教育の側の主導権の下になされるのを当然視するように成り、学習は受動態に成って、ヒト学習の本来態は疎外された。この過程で、自覚存在の学習の基本契機である自覚動機が軽視されるように成り、学習動機論は生体行動の即自態な心的過程の事実の説明に重点を移行したかの感がある。次第に一般化してきた教育心性には、「人間形成」は自分を抜きにした他者の形成を意味し、「人間は教育によってのみ人間になる」という著名哲学者の言説が他者形成の意義に了解される。「自己学習」という言葉が当たり前のように使われる。学習は自覚存在にとって始めから自己責任で行われるのが当然、という基本姿勢が教育の側に問われている。学習が種の本来性に則したも

のに成るためには、教育の側が、自分の善意を自己肯定した他者への期待価値実現主義心性から脱却する必要がある。期待価値は往々にして、他者に対して期待している本人の問題である。基調的姿勢(c)について；教育実践は、学習者が自分の学習の成果を現在と将来の生活へと実践していく、その生涯の過程を内包していなければならない。教育の実践は、学習成果の生活への実践のために奉仕するのが本来態である。現時点の学習者の生活感覚を無視することは出来ない。しかし、現在を積み上げれば将来がやすやすと自覚存在の尊厳性を実現する訳でもない。自覚動機は、学習の現時点ばかりではない将来を展望した成果を視野に入れない訳にはいかない。誰でも、楽しくなければ行為に積極的にはなれない。学習における楽しさが強調されるのは能動的行為を求めるからである。自覚存在にとって楽しさは、「これを知る者は……これを楽しむ者に如かず」（『論語』雍也篇）の箴言通り、自分のする事の意義が分かっている時のものである。その楽しさの中に、好奇心の対象にのめり込む楽しさも、行為そのものに成りきる楽しさも位置づけられるはずである。主客が転倒してはヒトの尊厳性は無意味になる。もちろん、主は自覚動機である。自覚によって実現するヒト本質の理性機能に内動しなければ、知的好奇心などの即自態欲求の学習動機はヒトの尊厳性を保障しない。

(1)実在的で実践的な理性概念の意義

考究を理性に拠る意図は、実在の自分への問題関心という、ヒトの本質である理性の向自態な心的機能の指向性と実在への問題関心の、言わばベクトル機能に基調を求めようとするとところにある。理性のベクトルは、自分に自覚を促す。当然、学習への自覚動機が成立する。

理すなわち実在は存在するものの原因に成るものであり、独立自全態である。それ自身に因ってでなければ実在では在り得ない。内的自然法である理性は自分存在の原因であり、理の可能態である実存の自分を理に実現するための理への性であるから、自分に自己批判・自覚を誘発する。自覚によって自分は独立自全な存在者への道をたどることが出来る。理性は自覚によって自己を展開する。自覚は、自分への実在的問題関心を自分に実態化して、自分を実在に実現しようとする意志に展開して理へと自分を形成する。理性は理に基づいた理への性であり、自分への実在的問題関心は理性の不可欠な属性の機能である。われわれの自分への関心は理性による自然発生態であるから、意識・無意識にかゝらず個性性に統合された意識現象全体に係わり、必然に実在の自分への関心に展開する。自然・生得の性質であるから、すべての年齢段階にヒトのものである。年齢によっては、特に低年齢では理性との係わりがなくなるというのなら、理性は種の本質ではないことに成る。低年齢者と理性との係わりを疑う感覚は、ひとつには、自覚存在とは認め難いということからきている。自覚存在とは自覚可能態な存在のことである。実践的に観れば明らかのように、われわれは自覚の完成態ではなく可能態である。自覚は理性によって自分に現象するから、自己原因である自覚によって成り立つ独立自全態であろうとする。自己原因である自覚は、自分が本来自覚体のはずであることを自覚する。このことを了解すれば、われわれは自覚の完成態へと無限に自己展開する。ヒトは、実在の自分への問題関心という意味で理性の心的機能体である。理性体は自分への実在的問題関心に実態である。

考究に実践的意義すなわち上記の意味での生活への実践的意義を求めて、出来るだけ(学

習) 個体の実感的な主観の視座を客観に捉えることを意図する。実践的意義を意図すれば、他者問題ではない実感の自己問題は自他に共通項である。個体の実感的な主観の視座に理性の上記ベクトル機能を捉えてみると、理に基づく理への性には、自分がなければ世界は無かったことは明らかな事実、と認知されることが認められる。この実相の認知実感、自分の実在を求めなければ世界の実在は意味を持たないことを了解する。理に基づく性は、自分存在の原理・本質は何であるのか、何故そうであるのか何の為にそうであるのか、という自分への存在論的問題関心に現象して、自ずから実在を求める。理性が主体に機能する過程に立ち入らなければ、ヒトのものとしての学習成立要件を求めることにはならない。実在を求める欲求が自分への指向性に機能すれば自覚が成り立つ。自覚は実在的自分形成への意志となり、自省によって学習を重ねながら自分を形成する。

後述の如く理性の向自態ベクトル機能は、低年齢期の自分感成立の原因と考えられる。それによって、生命個体生来の自己同一性が感覚化されて自分感となる。チンパンジー・オランウータンの自己感の検証は知られている。自己感とは即自態には生じない。何らかの自己存在への問題提起性が、もちろん無意識に機能していると観なければならない。だが、この自己感、自覚に発展しないから、自己感の成立に当たっての、自己の実在への問題提起性は機能していない、ということになる。自覚へと展開するヒトとは違う。ヒトの自分感、自分意識から自覚への展開可能性を内包している。他の生命個体一般は即自態意識現象であるから自己観が成立しない。しかし自己同一性が機能していなければ、生命個体が現象しない。自己同一性はもともと、免疫性のもとになる生命体生来の自己と非自己の識別しにくみに由来しており、生物に自然発生態である。即自態で当の個体には無意識なすなわち意識現象そのものの自律運動態である。生命個体現象としての自己同一性が自己展開していくために、自己を再組織・形成する自己組織性が必然に伴う。伴わなければ自己同一性は崩壊へ向かう。自己組織性の機能の指向性は向自のものであるが、自律神経的な意識現象として終始無意識機能であるという意味で即自態であるから、自己同一性を感覚化せず自己感を生じない。チンパンジー・オランウータンの自己感、無意識・即自態の自己存在への何らかの問題提起性が内動することに困っている、と観られる。低年齢期からのヒトの自分感には、自覚への展開過程が内包されている。それはひとえに、自分への心的機能が理性の内動であって、実在への問題関心が自覚を誘うからである。自分感が感覚化されて自我・自分への意識に展開し、自分の在り方を洞察・了解し、自覚してすなわち理性に因って自己原因的に自分を形成していく。自己組織化は生命体の自己の同一性維持・展開のための自然態な自己保障機能であるが、自覚動機によらなければ自覚存在ヒトの自己組織化・自己形成は成り立たない。生体ヒトは上記のように自覚可能態であり、本質の理性が向自態に機能して自覚が実態化していく。

自分への問題関心は、いわゆるメタ認知の視座であるが、人工頭脳への問題関心をも基調にした認知科学の視座は対象としてのヒトへのものである。考察の対象として扱うだけでなく、自他共通項である実感的な主観を通してヒトを客観に捉えることで実在を求めたい。客観を客観としてあつかう視座は、学習者の実感な立場で自分感を認知しにくいところが生ずる。また、近代以降の思考の傾向は、対象としてのヒトの意識現象の側面機能を固定的に分節化認知しがちであり、統合機能の総態である意識現象の実態に迫りにくいところがないとは言えない。もちろんヒト統合態は、生物体自然の自己同一性に基づいて自覚的に自分の心的機能を統合しようとする意志によって実現するものである。客観の内

的視座で実在を求めれば、何故・何のために、という理への本性的欲求内発の実感に基づいて、自分の存在の實在的意義を求めて実践化するという、自覚存在の心的過程が明らかになる。

理性といい知性といい或いは悟性といっても、実践的問題関心からすれば、意識・無意識の総態である一個体における心的機能の生物としての統合態に拠って認識・思考が行われる、という点では同種の事柄である。認識・思考は一個の生物体に統合された心的機能である。この視座は、認識・思考の機能を客観に捉えて機能の種類を区別する問題とは次元が異なる。区別が有意味に成るのは、機能の方向性においてであり、自分に時空普遍の意義を求めようとする問題関心である。実在を志向すれば問題関心は限りなく深化せざるを得ない。実践を希求すれば、理性による自覚可能態である自分への自覚は限りなく深化せざるを得ない。理性という表現は手段にすぎない。実在の自分への指向的機能に拠りどころを求めるから、知性・悟性よりも適当だと考える。

特に、知性と言わずに理性とするところには、現代では、対象世界である知の世界の意義が強調されすぎるの嫌いがあると感得されるので、この心的状況に対する意識もある。現代ではなく近代では自律性のよりどころである理性を、ヒトが万物の霊長である所以とする心性が一般であった。これは人々の自尊感情であり、自己形成と教育の基調であった。現代の自尊感情の傾向は、自分に内動する生体一般的な性質の普遍性によりどころを求めている。もちろん、近代の自尊感情による自己肯定的な心の在り方には欠陥がある。自尊が自律性を活性化すればいいが、いわれない尊大さを招来し生態系を歪めて自分達の生活基盤まで脅かすようになってきた事実がある。現代の自尊感情は、ヒト能力の多様性に埋没して自己肯定した結果のものであり即自態であって、尊大感は招来されにくい。反面、自律的決断と選択の絶対的自由のよりどころとしての、自覚存在の主体性は機能しにくい。存在者の実相からすれば、非理性体はそのまゝで本来・自然態であり、理性体は自力すなわち自覚で本来性を実現しなければ自然態には成れない。自律性の契機である理性はヒトの本来性であって、自然態であるためには自覚によって自分で本質を機能せしめなければならない。自覚存在であってはじめて、他の生命体と平等に種としての存在者である。自覚は理性によって徐々に実現していく。

現代人には、向自態に自律性を求める心的機能の煩わしさを嫌うところがある。知の世界は個体から外向きに、生体自然な即自態的欲求自体の自律運動として展開する。知性はもともと、生物体の自己保存・実現のための自己の身体状況を含めた周囲状況への外向き関心である。機能の多様な複雑さは他の生体と異なる特徴であるが、知性がヒトの本質ではない。生命体の本質は言うまでもなく生命現象そのものであり、生命現象において個体の統合態を維持・展開していく自己同一性・自己組織性に本質が実現して生命現象形態が成立する。自己同一性・自己組織性が即自態的に機能するのが生体一般であり、自覚的に機能するのがヒトである。本質であれば個体の全体の在り方に関わる。知性は即自態であり、全体に関われば個体が即自態となりヒトの種では無くなる。知的欲求は外向きのものだから、周囲に向かって自分の生体性欲求の自己展開を主張する。自律性のよりどころにはならない。ヒトの本質は理性である。生体としての欲求自体の自律運動には同意しない。自律性は自分の個性性を統合態運動せしめようとする。

学習との関係でみると、自覚動機はヒトの学習成立に不可欠契機であり、知的好奇心の自動・内発な学習動機は生体一般的対象世界への欲求の自律運動であって、学習主体自

体の自律性に係わっていない。生体欲求が自分の承認・同意なしに欲求自体で自律運動しては、ヒトの行為（学習）の尊厳性が侵害される。対象世界への知性の自己展開にヒトの性質の中核機能としての市民権を与えてしまうと、知の世界が自覚動機の成立を妨げる。自分への実在的関心が疎外されるからである。自分を通じたヒトの実在への存在論的問題意識の展開は、統合運動態としての個体の意識現象全態の意義の実感における、自覚動機の成立に至る。

理性概念によると言っても、われわれの認識・思考は生体としての種の有機的統合態に機能するのであって、理性や知性が二者択一に現象する訳ではない。ヒト個体の統合性は生体自己同一性と意志的同一性の複合態である。自覚動機の志向性における、あたかも知的欲求の自動展開のごとき自然で生き生きとした学習行為が求められる。そこに生活自立への必然・不可避な経験獲得行為である意義の了解に基づいた、種の主体的学習が成立する。

(2) 自分感の成立

生後一、二カ月のきわめて低年齢の時期から自分感の発達することは知られている。乳児が早くから自分の手指に関心を持っておしゃぶりに至る過程は、視覚の対象物として感覚される自分の手指の自己操作性によって、自分感を獲得する意義に受け取られる。さらに低年齢期の、自分の鏡像・写真・名前などに対応した自分感、モデルの行動を模倣したときの自分感などについての知見は、心理学研究によって提示されている。自分感の成立は、手指や鏡像等の具体的な手がかりによって、理性の向自態ベクトル機能が活性化したために個体生来の自己同一性が感覚された、という意義に観ることが出来る。

感覚された自己同一性である自分感は、きわめて低年齢の場合には半ば知覚されてはいるが自分感的反応とも言えよう。即自態・無意識な自己同一性は客我的意識が現象しないから自分感に成らない。自分感はきわめて低年齢からのものであるから、ヒトは自分感可能態として生まれ、生来の理性の向自態機能によって知覚化されるものとみらる。なかば知覚された自分感的反応は、しだいに自意識・自分概念・自我意識に展開し、やがて自己意識のなかで理への本性的欲求に目覚め自分の実在的意義の実現を求めて自覚動機から自分形成へと理性体を展開する、ヒトの種のものである。そのように展開しないことを想定は出来ない。想定出来ないのは、自分感と自覚では自分を捉える機能の指向性が共通していることは勿論、自分を認知するという属性も同じであり、同じく自己内の理性の欲求に困っているからである。客我的意識の自分への関心が深化すれば、実在の自分を求める意識は必ずから現象する。実際にはこの展開過程がほとんど進捗しなかったり不十分である場合が幾らでもあるが、それは自覚が自分に実在的在り方を欲求する理性の機能であり、自己原因にすなわち自覚に因らなければならないからであって、自覚自体が課題だからである。自覚の性質機能が不十分でも、自己責任の問題だから放置しておけばそのまゝになるし、客観的には不十分でも当人は自己肯定している場合もおゝいにある。自覚存在は言わば自覚に至ろうとする存在である。従って、自分感可能態は自覚可能態である。向自態理性の機能によって現実態となる。自覚の性質は、自覚を自己原因として自覚完成態へ展開する。

自分感を担っている基体は、生命体自然な即自態の個体生命現象であり、自分感を現実

化する原因は、ヒト個体本来性としての生得な理に基づく性に拠った実在への向自態意識現象のベクトル機能である。個体生命現象としての外界への即自態意識現象が、自分への存在論的問題関心との接合点で自分感を現象する。いわゆる超自我の原理的意義はこゝに在る。現実原則態を形成するのが超自我の本意ではない。自己超越して自覚存在であるヒトの実在性実現態としての自我の形成に主意がある。ヒト個体の生体即自態の心的機能は可能態自分感であり、自分からの理性体向自態の心的機能によってその可能態が実態となる。実態自分感とは、なかば知覚されたものであれ十分に意識されたものであれ、何のための自分かを了解しその了解を実践化すべく意志して自分を形成していく、自覚へのものである。

五、六歳ごろから自分感の感覚意識化が行われるとされている。次の様な低年齢者の口頭詩があった。

おとうさん おやすみなさい おかあさん おやすみなさい しんごくん こうじくん ゆ
うたくん せいやくん みみちゃん こみねせんせい ぼく おやすみなさい (滝島 一
太・五歳)⁽¹⁾

自分への挨拶が自分感の表現であることは言うまでもない。これを、余りに自然であるために偶然にそう言っただけだとしてしまえば、それまでの事になる。しかし、明確な客我意識の表明の意義に着目すれば、児童期に達する頃までの生活経験に基づく感覚内容の豊かな展開と、それに応ずる向自態意識現象の上記ベクトル機能の活性化過程が了解され、自覚可能態の実態化の筋道が明らかに成る。向自態な実在への問題提起性の意識現象すなわち理性機能が活性化される方向へ経験は再構成され、生体として自己保存・実現を欲求する即自態意識現象が自覚態へと実現される筋道である。客我意識の自分感の成立がいかにも自然であることは、自覚存在であることがヒトの本来態であることを我々に納得させる。親・友達・保育者と同列に自分が挨拶の対象となる意識の意味内容は状況内存在としての自分の了解であり、その性質は自覚の属性である。五歳の口頭詩当人が表現の基調としてどのような暗黙知を内包しているかを推定することは出来ないが、状況内の必然な関係存在の性質を具体化して楽しげに表現する心性の質の次元は容易なものではない。しかも非常に自然であるところからは、表現能力の問題は別にして、この年齢期に普通の心性状況であることが推測される。

低年齢期の自覚の性質機能を定量的発達観で捉えるのは、必ずしも妥当な方法とは思われない。

(3)自分感における超越的実在性

感覚化された自分感が成立すれば、その自己同一感において自分への実在的関心はさらに活性化の手がかりを得る。自分感とは、自分への実在的関心を原因として成り立ったものである。感覚を明確化して自分を意識的に認めるように成れば、自分意識の自己同一性において実在の自分の超越性と自分に実在性を求めさせている意識現象への関心が意識化されてくるのは当然である。しかしこれは客観的論理であって、発達段階の過程にかかわらず、初期と考えられる自分感自体に、超越性の機能を認めることが出来る。自分への意識

における超越的實在性実感の例を、ふたゝび『こどもの詩』の口頭詩に求める。

(お昼寝しなさい) あーん げんきが とまらない! (加藤 郁・三歳)⁽²⁾

きわめて自然なこの実感は自分の生命体现象の実感であり、即自態生命現象を、そこに内動する向自態の自分への問題関心が捉えた接合現象、すなわち自分感成立の表明であると同時に、これは単なる自分の感覚ではなく、自分感覚の根拠への関心の表現でもある。實在の自分への実感は自分の在り方の洞察を可能にし、實在性に則した自分形成への自覚動機の成立の可能性を実態化に近づけるものである。超越性の実感がきわめて自然に表現されているところからは、単なる自分感覚にみてとれるものも、實在性・自己超越性への感覚を下意識的に内包していることを、われわれに納得させる。もともと、ヒト生体自然な理性の向自態意識現象による自分感であるから、可能態自分感の本質は可能態自覚であり自分感の本質は自覚である。「とまらない」意義を了解すれば、当人は「げんき」の主体となる。存在者にとって主体になるとは、必然な存在者の運動法則に同化することである。自覚存在はその意義を了解して主体となる。生命体の自律神経的気質運動「げんき」は自律運動態だから個体の意思に係わらないので「とまらない」。自然な生命体即自意識現象の活力であり、了解は、理性向自態ベクトル機能によるものだから、「げんき」の主体となる自分の成立になる。

再利用の口頭詩だが次の例もある。

「ぼくのした」:「うごけっ」といったときは うごいたあとだ ぼくのしたをぼくより
さきに うごかすのは なにや (しまだ のぞむ・五歳)⁽³⁾。

舌の動いたのが「うごけっ」と思った時なのか、本当に言った時なのか事相は不明だが、事実関係はもちろん脳神経生理機能の次元に在り科学は十分に説明をする。着目されるのは現象についての、どのようにしての関心ではなく、何が何のためにという現象根源への問題関心である。自分の意思にかゝわらない「ぼく」を超えた自分現象の實在への感覚が、端的に表現されている。直接的表現の強さには、理に基づく性が何のためにという問題を自分に提起したときの自分感の表現、という、即自態生命現象と向自態問題意識の接合現象的解釈では間に合わないものがある。むしろ、ヒトとしての生命現象自体の実存的問題提起性の強烈さに、本来は實在性へと能動的である向自態の理に基づく性の機能が反応したときの自分感の表現、と解するほうが妥当であろう。個体生命現象を担っている身体の気質運動の自律神経的な内動や意識現象に、感覚意識態の自分を越えた自分の實在性を、気質運動に基づいている主観が直証的に発見した。自分に内動する超越的根源への新鮮な気づきに理性は活性化して、生命現象の実存を存在論的問題提起に捉えて自分感として反応した。個体生命現象の自分を内在的に超越的している實在性への直観は実感として明瞭である。「ぼくよりさきに うごかす」ものは、言わば「どこからきたのや」という問題関心は、内在的超越性の実感である。実感は、自分の内在因としての超越的實在性の了解につながり、主体性確立のよりどころとなる。自分感から自覚への確かな筋道が見込まれる。さらに、自分に内動する超越的な實在の属性に向かう先験的な或いはメタのメタな問題関心への展開も見込まれる。該書の著者もこの点に言及している⁽⁴⁾。表現力は個別の事柄だが、

自分への関心が実在の自分への何らかの気づきに至るのは、十分に現実の事態である。
 自分のへの実在的関心が活性化する一つの契機は「影」の存在であると考えられる。

「秋の夜」：夜、お母さんとさんぽにいく。……大きな木のかげが 私とお母さんをのみこむ。私のかげがきえてしまった。 明るいところにいくと 私そっくりのかげがでてくる。かげは私のまねをしている。 でも、かげが動かなかったらこわい。 （苗代 麻希・小学三年）⁽⁵⁾

影は古来、魂の象徴として文学作品にしばしば登場して来たり、近年では無意識的な別の人格を意味する精神分析の学的見解が行われている。今は知の時代だから、見知らぬもう一人を垣間みたい自分への好奇心が触発されるかも知れない。それを踏まえて、と言うよりもそうであるから、理性機能における自分感を求めているこゝでは、例えばダンテが敬仰してやまなかったウェルギリウスの霊性を影に観たそのような、個の実在的根拠の意味に解するのが妥当のように思う。影は確かに自分感を活性化し、自分感覚内容内容を豊かにする。理性の向自態機能の反映と影を観れば、影による自分感とは自覚への契機と成りうる。しかし、感覚内容の多様さと現代心性状況はそうはさせないかも知れない。同時に、自分への実在的関心とはヒトの生来・自然のものであり、理性は自己原因的に自覚を必須に求めるから、影は自分の超越的実在からの問いかけに成る可能性はある。自分の「まね」をしながら、あなたは誰と問うているようである。自分と行動を共にするが時々みえなくなる影を自分の心の象徴と受け取れば、実在の自分への機能が影によって活性化する。自分と行動をとともにせず醒めた批評家である動かない影を想像すれば、反語的問題提起にも成る。上巻の考察過程から、感覚意識的自分感にはそれが十分に可能である、と言うことが出来る。

(4)低年齢期の理性活性化保障原理

自覚可能態：ヒトは本来性である理性を自覚によって実現する課題を負って生まれてきたから、実存が本質に先だっている。自分の本来性を疎外して状況の不条理に埋没し自分自身の不条理な実態を自己肯定しがちな実存の自分に、内在因としての理性は理に基づいた理への性として、自分の実在性へとその属性機能である向自態のベクトルが問題を提起して自覚となる。理性はヒトに必然の本質であり、自覚存在であることは必然に当為の課題である。向自的実在志向の問題提起によって自分を個性性において理へと有機的に統合機能せしめようとする、生命の現象である実存の自分に自己展開した理性は理性欲求に実態化して自覚となる。理性が欲求に実態化した自覚は、即自態意識現象によって自分を分節化機能せしめようとする生体としての諸欲求との矛盾にせまられて、実存の自分を独立自全態としての絶対の自由な主体に実現すべく、自分を自覚可能態に捉える。もともと自分は必然に自覚可能態であるが、当為の課題であることを自覚しなければ現実態になることは偶然性に委ねられる。自覚は自覚によらなければ実現が可能にならない。われわれの実態が自覚可能態であることを自覚することで漸く自覚実現過程が始まろうとする。自分を捉えることによって成り立つ自覚は意識・無意識の統合態である意識現象の全態にかゝり、捉えられる自覚可能態の自分に自分感的反応として機能を明らかにし始める。

自覚によって本来性の理性を実現することは、ヒトの生存上のきわめて難しい根本課題である。難しい課題と理解しなければ、有史以来のヒトの実態を説明することは出来ない。実態から目をそらさないと、成人になればヒトが自覚態になる、という説明を納得することは出来ない。ある年齢になったら忽然と自覚存在ヒトになる訳ではない。若年期に形成された自覚の能力が退化する場合は幾らもある。功利主義の社会的自我を自覚に取り違えている例などは枚挙にいとまがない。年少者が自覚において未熟であるとか年少者には自覚は不可能だとか安易に断ずることが出来るのは、自覚の性質を客観にすなわち他人事に捉えているからである。他人事であると、自覚は完成態的なものでなければ自覚ではない。自分感を自覚の性質機能と捉えるのが難しい。無意識的な自覚の機能や可能態を見逃してしまう。完成態は目標であって実態ではない。無限の課題である。さらに、自覚は自覚に留まらず自己形成の意志と成り実践されなければならない。完成態が無限の目標であることに居直れば自覚は退歩する。完成態に向かおうとするから辛うじて現状維持も可能になる。

主体的真理は誤りを犯しがちだが、実感的な主観の視座に客観を捉えようとすることで自覚が無限の課題である意義が了解される。自覚の性質はヒトの本質によるのであるから個体の全体性に係わるものであり、実現に長期を要するものであるから、特定単体の能力・才能のごとく目に見えやすくはない。医療診断技術の進歩もあって科学的関心が高まり、胎児期からの特定能力・才能への或いは美的感性や情操の可能性への働きかけは一般化している一方で、胎児を自覚可能態とみてこれに働きかけることの意義は、実感として認められにくい。自覚可能性を刺激して活性化するには、基本において、個体を特に低年齢者を自覚可能態として実感に捉えることが要件になる。実感の拠りどころは、捉える側が対象の実感的な主観の視座に自覚可能性を観るところに在り、自分の自覚可能性を客観に観るところに在り、ヒトが自覚可能態として実態であってそれが自覚存在の意義であることを了解するところに在る。実感とは、ヒトが無限の可能態であり、だから未熟な自覚存在であると確信することである。確信は行動に多様な形態で顕れる。低年齢者の感覚内容を豊かにするのは周りの者の在り方であるから、その意味で実感とは低年齢者自体のものでもある。

生命個体としての自律神経的な自己同一性は自己原因的に在ろうとする意図的自己同一性に複合され、ヒト個体自己同一性が成立する。理性の性質はわれわれに生来のものである。無限の可能態として未熟であることを自覚して、完成態を志向して自覚動機に基づいて自分を形成していくとき、はじめて、他の生体と同列に、種において自然体と成る。われわれの生得の能力は種として自覚的な自己実現のための与件であって、それ以上でも以下のものでもない。

低年齢期に感覚化される自分感とは、乳児期に形成される下意識的な自分感に基づくものであり、それなくしては成り立たない。いずれも理性の自分への実在的問題関心に由来するものであって、自覚への展開過程が予定されている。年齢に応じた経験的感覚内容がその時点での自分感の実質を保証している。乳児期なら、例えば鏡像に応じた無意識的な自分感が成立する。児童期なら、これまでの生活経験に応じて状況との相関に自分感を感覚する。さらに、自分の実在性への関心を抱くように成る。理性体特有な自分への実在的関心のベクトル機能が、生物であるヒトの自分でありたい可能態自分感の即自態意識現象の欲求との接合点で、年齢段階に応じた自分感を保障している。自我・自分概念など類似の

意識現象を原因から捉え総称して自分感の意義に捉えれば、どの年齢の自分感も属性は共通である。このような視座は、定量的ではなく定性的な発達観でヒトの自覚性質の展開を観ようとするものである。定性的に発達段階を観れば、現象としての年齢による違いを質的高低としてしまう誤りを犯す危険が少なくなる。年齢や個性に応じて理性が自分感に現象している発達の実相を観ることが出来る。向自覚意識現象の指向性と性質を実践的に機能させようと意図すれば、成人になれば自覚が完成する訳ではない、というヒトの実態についての認識が下支えになる。胎児は理性体として他に替えがたい個性体として生命活動を始めた。われわれはその事実を畏敬することが出来る。

他律から自律への問題：年齢にかゝらず理性体であるという観方からすると、いわゆる道德性の発達を他律から自律への過程とするのには実践的な危険の伴うことが認められる。対象を自律性において未熟とみるから他律的道德観が生ずる。未熟にみると、やゝもすれば大人という自覚存在とは違う別の生命体と捉えてしまわないとは限らない。これには、子どもを子どもとする近代新教育観が作用しているかも知れない。子どもは子どもだし大人は大人だが、子どもも大人も同じくヒトであり自覚存在として生まれてきた種である。自覚存在にとって道德・自律性はあくまでも自分の主体的問題であって、道德的とみられる行為を内面性に関係なく現象することではない。

他律的な道德はない。動物の調教みたいに行動を獲得させるのは道德の問題ではない、と誰でも認知している。その認知には、ヒトを自覚存在と捉える意識が働いている。年少者の道德性を言う場合にも、自律の可能性を見込んでいない訳ではない。父母のしつけを通じて超自我が形成され現実原則運動体が成立するという論理にわれわれが納得するのは、超自我の成立可能性を認めているからである。超自我は理性に基づく自律の性質であり、しつけに応じて活性化する。しつけは外からの理性への実在的問題提起である。具体的な生活行動様式の意義が理に基づく性によって了解されて内面化され自覚されるから自律性が活性化する。叩いてでもというしつけ親の巷間市民権はまだ健在である。個体自立に不可欠な身辺処理能力に近い生活行動様式ほど是非にもと思う愛情は、愛情を感じ取って応えようとする心的態勢に受け入れられ、行動様式の意義が内化して自覚による自律性の活性化が結果する。この過程がなければしつけは成立せず、調教に墮する。

現象からすれば、確かに他律から自律への過程が道德性の発達にみえる面がある。しかしそのような捉え方は終始客観の視座であり、発達の当事者の実感的な主観の視座から道德性の展開を捉えるには不十分である。道德性の発達を実践的に支えるのは、理性は本来性であるから年齢にかゝわないという、了解してみればきわめて自然な我々の心性である。近年話題となった本の、生活哲理は大学院にではなく幼稚園や日曜学校の砂場にあるという主題⁽⁶⁾のひそみに倣えば、実生活上の行動様式の意義は結局のところ健全な常識であり、幼児期にあっても大人に成ってからでも同義のものである。年齢段階を経て得られていくものではない。年齢段階に応じて展開するのは、当事者の生活経験内容量による行動様式の現象的多様性であり、客観的に捉え易いのはその量的相違である。道德性の発達は終始、理性の機能過程である。

おわりに

ヒトの学習は自覚動機によらなければ成立しない。ヒトが理性を本質とする種であるこ

とは必然・不可避な事実であって、われわれの選択事項ではない。理に基づく性は、理を求め理を实践せざるを得ない。理は自己責任によって在るより外に有り様がない。自分に内在する理への性は、自分を自己責任体へと実現していく。理へと自分を形成していく性は、実存の自分を自覚可能体として自覚させる。理性は、その属性である実在志向の向自態のベクトル機能によって実存の自分に自覚を誘発し、自覚可能態を現実態にしていく。自覚は自己責任上、自覚のみによって実現が可能になる。自覚存在は自覚の実践態である意志によって自己形成される。理性体の学習は自己責任上、自覚動機によって行われる外はない。自覚存在は、生体必然な生活自立のための経験獲得行為の意義を了解・自覚してその主体となり学習を实践し、さらに自覚動機を深化して、不可避に状況内の存在者である自分の関係の性質においてこそ直接の性質を実現すべく、この存在の実相の主体となって自己超越へと自分形成の学習を行う。ヒトの種として生まれた以上、存在者の自然法の枠外に在ることは出来ないことの了解に基づいた主体性の確立以外に、生活者としての道はない。必然の自然法は、その意義の自覚に基づいて果たさざるを得ない当為の課題である。

われわれが存在者の不可避な自然法の主体として自由意志によるヒトの種の学習を実現するためには、年齢にかゝらずヒトが理性の現実体であることの実感のよりどころを明らかにしなければ済まない。自覚存在の主体性は、即自覚意識現象の自律運動態である内発性や自主性と同義にはならない。自覚存在の自己決定性は自律的である。自覚存在の学習動機は、自分の行為の意義に主体となって目標を自律的に自己決定することで成立する。しかし、自覚は実態のわれわれには無限の課題であるから、自覚動機が十分に成立してから学習が始まるという図式は現実態ではない。その時点その時点の自覚の質に応じた学習が展開する。

自覚の質は年齢に対応してはいない。自覚の完成態に至ろうとする意志が自覚の主体である。低年齢者の自分感は理性の機能の明証態である。

注

- (1) 川崎 洋撰『こどもの詩』（『読売新聞』連載）平成6年4月29日分
- (2) 同 前・平成6年12月17日分
- (3) 足立巻一著『子ども詩人たち』34～35頁（理想社・昭和54年）
- (4) 同 前
- (5) 都立教育研究所『教育じほう』平成4年11月号「子供の詩」
- (6) ロバート・フルガム著 池 央耿訳『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』17頁（河出書房新社・平成2年）